



沖縄の俳句

おおしろ 建・選

(俳人)

『句集 地球の自転』野ざらし延男（1967年、新林社）

1960年代、沖縄文学の胎動期ともいえるこの時期に発行された野ざらし延男の処女句集。312句が収録されている。金子兜太による「序に代えて」のほか、「跋文」を新屋敷幸繁、「解題」を益田清が執筆。〈コロコロと腹虫の哭く地球の自転〉



地球の自転

『沖縄俳句歳時記』小熊一人（1979年、琉球新報社）

小熊一人は1975年から3年間、沖縄気象台に勤務。「琉球俳壇」（琉球新報紙）の元選者である。沖縄の季節、自然、行事に即した歳時記として「うりずん」「清明祭」などの季語が並ぶ。



沖縄俳句歳時記

『九州・沖縄ふるさと大歳時記』（ふるさと大歳時記7）角川文化振興財団編（1991年、角川書店）

カラー写真を織り込んだ豪華な大型本。全国の都道府県を7つの地域に分けた全七巻と別巻一のシリーズ。季語のほかに、沖縄の地名を織り込んだ編集がユニーク。「沖縄の自然と風土」の解説と句。「沖縄ふるさと名句選」が収載されている。



九州・沖縄ふるさと大歳時記

『沖縄俳句総集』野ざらし延男編（1981年、野ざらし延男）

戦前から現代まで、有名・無名を問わず、海外を含む全国規模の沖縄作品を収録。収録者数は308人、一万句を越える沖縄俳句の万葉集である。「大きな金字塔を打ち立てた」と仲程昌徳に絶賛され、「空前にして絶後の労作」と岡本恵徳に激賞された一冊。



沖縄俳句総集

『句集 翠巒の島』数田雨條編（1954年、みなみ吟社）

数田雨條は戦後初期の沖縄俳句界の勃興に貢献した。1946年に復員した後、1950年に戦後初めての俳句グループ「みなみ吟社」を創設し、月刊句誌「みなみ」を発行。同句集は総勢56人の5年分の合同句集。



句集 翠巒の島

『甘藷を負ひて』久高日車（1964年、久高普成）

久高日車は1901（明治34）年、那覇に生まれる。沖縄の戦後史が活写された句集。矢野野暮が跋文「“甘藷を負ひて”を追ふて」を執筆。〈弾拾いがんじがらめに子を背負う〉〈甘藷負ひて腰入れ直す緑陰に〉〈わが墓地は軍用地なりつわの花〉



甘藷を負ひて

『句集 向日葵』遠藤石村（1965年、草土社）

糸満に生まれる。1956年より1977年まで琉球新報紙の「琉球俳壇」の選者。写實的ロマンチズムを提唱し、有季定型の立場から後進の育成と沖縄俳句界発展に尽力した。糸満市真壁城址に〈製糖期の日がどつしりと村つつむ〉の句碑が建つ。



句集 向日葵

『玉城一香全句集』玉城一香（2011年、沖縄俳句研究会）

1941年、那覇に生まれる。1983年から1997年まで沖縄タイムスの「タイムス俳壇」の選者。俳句は有季定型の立場から作句し、「認識の文学」とであると説く。同句集は『地蟲』『地の力』『梅雨の島』『熱帯夜』『遠夏野』をまとめた全句集。



玉城一香全句集

『沖縄現代俳句集 タイムス俳壇12年』矢野野暮編（1969年、沖縄タイムス社）

1956年から12年間の「タイムス俳壇」に投稿された上位秀作の矢野野暮による選をまとめたもの。伝統俳句の立場から、風土性を掘り下げることが提唱した。選評を通して俳句とはどうあるべきかなどが丁寧に書かれている。



沖縄現代俳句集
タイムス俳壇12年

『へその城も』（沖縄現代俳句文庫5）作元凡（1992年、脈発行所）

1922年、那覇に生まれる。野ざらし延男が「解説」を執筆。沖縄の口語俳句の旗手として評価している。〈へその城もぬくみ記憶の母がわらっている〉〈ファミリー人形が歩く 絶望ってすごいね〉〈メスの魔術なめらかに妻の舞台ごらんよ〉



へその城も